

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 13 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22592362

研究課題名(和文) 臨地実習指導者のキャリアアップに向けた看護継続教育支援システムの開発

研究課題名(英文) Development of a continuing education system in nursing to promote the professional development of clinical instructors

研究代表者

中山 登志子 (NAKAYAMA, Toshiko)

千葉大学・看護学研究科・准教授

研究者番号：60415560

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、臨地実習指導者のロールモデル行動および学習ニーズを質的帰納的に解明し、これを基盤に教育ニーズと学習ニーズを測定できるアセスメントツールを開発した。また、実習指導者が直面する問題を網羅するカテゴリシステムを開発し、これらを統合して看護継続教育支援システム(臨地実習指導者用)を開発した。このシステムは、実習指導者が現実に直面している問題に着眼した教育プログラム立案を支援し、指導者の問題克服とキャリア発達を促進する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to develop a continuing education system in nursing to promote the professional development of clinical instructors. There were four stages in developing the system: (a) Exploring the role model behaviors and the learning needs of clinical instructors by qualitative and inductive method. (b) Developing an Educational Needs Assessment Tool for Clinical Instructors (CIE NAT) and a Learning Needs Assessment Tool for Clinical Instructors (CILNAT) based on qualitative and inductive research findings. (c) Identifying the problems encountered by clinical instructors while teaching nursing students in clinical setting. (d) Developing the continuing education system in nursing for clinical instructors through integrating these research findings. This system supports to plan the educational programs focused on the problems which clinical instructors actually encounter to overcome the problems by clinical instructors.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：臨地実習指導者 教育ニーズアセスメントツール 学習ニーズアセスメントツール キャリア開発 看護継続教育

1. 研究開始当初の背景

時代は刻々と変化しているが、看護基礎教育課程に在籍する学生の看護実践能力の修得に向けて、看護学実習の重要性には普遍性がある。しかし、医療安全確保に向けた取り組みの強化や患者の人権意識の高まり等により、看護学実習中に学生が経験できる援助の範囲は縮小化し(看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書,2003)、学生は実習目標達成に難渋することも少なくない。このような状況を前提にしてもなお、学生が必須の看護実践能力を修得するためには、教員と協同し教授活動の一端を担う臨地実習指導者(以下、実習指導者)の存在がこれまで以上に重要となる。しかし、複数の研究(石崎,2007、宮尾,2006)は、研修を受講したにもかかわらず、実習指導者が「学生に適切に助言できない」「自己の指導方法に自信が持てない」「評価の方法がわからない」等の問題に遭遇しながら、その役割を遂行している状況を明らかにした。また、学習の必要性を感じながらも、「仕事に余裕がない」等を理由に学習欲求が満たされない状況を明らかにした。これらは、実習指導者が研修を受講し実習指導に必要な教育を受けた後も、多様な問題に直面し学生の学習活動支援に困難を来し、効果的に教授活動を展開できていない現状を示す。同時に、研修受講後、実習指導者は、これらの問題を克服するために強い学習ニーズを感じながらも、学習機会をもてないまま実習指導の役割を担わざるを得ない状況が存在することを示唆する。

以上は、大学の教員がファカルティ・ディベロップメントを求められるように、教員と協同して教授活動の一端を担う実習指導者にも継続教育の機会の提供が必須であることを示す。また、実習指導という役割を果たすために必要な教育や自己の問題克服に向けて、実習指導者自身が要望する学習を明瞭にし、それらを系統的に提供できる教育プログラムが必要であることを示唆する。

現在、各都道府県や看護協会等が臨地実習指導者養成に向けた教育機会を提供しているが、研修を受講し終えた実習指導者への継続教育の多くは、医療機関がそこに就業する看護職者に提供する教育、いわゆる院内教育に委ねられている。また、院内教育の担当者は、実習指導者を対象にした研修を自らの経験に基づき試行錯誤しながら企画・運営している現状がある(石垣他,2006)。

日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム(舟島,2007)は、看護職者に高品質な看護継続教育を提供し職業的発達を支援することを通して、看護実践・教育の質向上を目的とする。このシステムは、2種類のアセスメントツールを使用し、看護職者の教育ニーズ・学習ニーズを測定し、その診断結果に基づき看護職者が就業する施設あるいは看護継続教育機関の実情に即し

た教育プログラムを立案するという特徴を持つ。また、このシステムの有効性、確実性は既に検証されている。

以上は、医療機関に就業する実習指導者の直面する問題克服とキャリアアップを旨とした継続教育プログラムの立案を実現する看護継続教育支援システム(臨地実習指導者用)の開発に向け、日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システムを参考にできることを示す。しかし、このシステムが開発したアセスメントツール2種類は、クライアントに看護を提供する看護師を対象にしたものであり、実習指導の役割を担う看護職者を対象としていない。また、国内外の文献を検討した結果、実習指導者の役割の特徴を反映した教育ニーズアセスメントツール、学習ニーズアセスメントツールは開発されていないことを確認した。そこで、本研究は、実習指導者の直面する問題克服とキャリアアップを旨とした継続教育プログラムの立案を実現する看護継続教育支援システム(臨地実習指導者用)の開発を最終目標とする。

【引用文献】

- 厚生労働省(2003):「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書,看護,55(14),139-144.
- 石崎邦代他(2007):臨地実習における実習指導者の困難とその支援,第38回日本看護学会抄録集,149.
- 宮尾梨絵他(2006):臨床実習指導者講習会に参加した臨床看護師の学習ニーズ,日本看護学教育学会誌,16,93.
- 石垣富士子他(2006):臨地実習指導者の教育対策を考える,公立能登総合病院医療雑誌,13-15.
- 舟島なをみ編(2007):院内教育プログラムの立案・実施・評価-「日本型看護職者キャリア・ディベロップメント支援システム」の活用,医学書院.

2. 研究の目的

本研究の目的は、医療機関に就業する実習指導者の教育ニーズ・学習ニーズの診断結果に基づき、実習指導者の直面する問題克服とキャリアアップを旨とした継続教育プログラムの立案を実現する看護継続教育支援システム(臨地実習指導者用)を開発することである。

この目的は、次に示す目標4項目への到達を通して達成される。

- (1) 信頼性・妥当性を確保した実習指導者の「教育ニーズアセスメントツール」「学習ニーズアセスメントツール」を開発する。
- (2) 実習指導者が直面する問題を網羅するカテゴリシステムを開発する。
- (3) 実習指導者が直面する問題と教育ニーズ・学習ニーズの関連を解明する。
- (4) (3)の結果を反映した教育プログラム事例の提示と立案方法の記述を行い、看護継続

教育支援システム（臨地実習指導者用）として統合する。

3. 研究の方法

研究目的に沿って、以下の4段階を経て研究を実施した。

(1) 第1段階：実習指導者のロールモデル行動および学習ニードの解明

研究対象者：病院に就業し、実習指導の役割を担っている看護職者であり、研究の参加に同意が得られた者を対象とした。

測定用具：実習指導者のロールモデル行動および学習ニードを問う質問と対象者の特性に関する質問を含む質問紙を用いた。実習指導者のロールモデル行動に関する質問は、ロールモデルの有無を問う選択回答式質問と、ロールモデルが「いる」と回答した者にその具体的な行動を問う自由回答式質問により構成した。また、学習ニードに関する質問は、学習ニードの有無を問う選択回答式質問と、学習ニードが「ある」と回答した者にその具体的な内容を問う自由回答式質問により構成した。

質問紙の内容的妥当性は、数名の実習指導者への聞き取り調査を通して確認した。

データ収集方法：全国の病院の看護管理責任者、実習指導者講習会の責任者に研究協力を依頼し、承諾の得られた17施設の実習指導者809名に責任者を通して研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を配布した。回収には、対象者が個別に投函する方法を用いた。

分析方法：Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法（舟島, 2007）を用い質的帰納的に分析し、実習指導者のロールモデル行動および学習ニードを解明した。

(2) 第2段階：信頼性・妥当性を確保した実習指導者の「教育ニードアセスメントツール」「学習ニードアセスメントツール」の開発

質問項目の作成・尺度化とレイアウト：第1段階で解明した実習指導者のロールモデル行動（教育ニード）、学習ニードを各々基盤に質問項目を作成し、尺度化した。

教育ニードアセスメントツールは、7下位尺度合計49質問項目を作成し、各質問項目を4段階リカート法により尺度化した。また、選択肢を「非常に当てはまる(1点)」、「かなり当てはまる(2点)」、「やや当てはまる(3点)」、「ほとんど当てはまらない(4点)」と設定した。

学習ニードアセスメントツールは、21質問項目を作成し、各質問項目を6段階リカート法により尺度化した。また、選択肢を「とても必要(6点)」、「必要(5点)」、「少し必要(4点)」、「あまり必要なし(3点)」、「必要なし(2点)」、「全く必要なし(1点)」と設定した。

アセスメントツールの内容的妥当性の検討：3病院に就業し、実習指導の役割を担っている看護師3名を対象に専門家会議を開

催した。専門家会議を経て修正したアセスメントツールを用いて、便宜的に抽出した4病院に就業する実習指導者50名を対象にパイロットスタディを実施した。これらの結果に基づき、実習指導者が回答し易いよう質問項目の表現を一部修正した。また、選択肢が適切に設定され、かつ識別力を持つことを確認した。

全国調査

1次調査：「教育ニードアセスメントツール」「学習ニードアセスメントツール」の信頼性・妥当性の検証を目的に調査を実施した。測定用具には、作成した2種類のアセスメントツールと特性調査紙を用いた。全国の病院名簿より無作為に抽出した299施設の看護管理責任者に往復葉書を用いて研究協力を依頼した。承諾を得た143施設の実習指導者1,309名に看護管理責任者を通して、研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を配布した。回収には、対象者が個別に投函する方法を用いた。調査期間は、2012年7月6日から8月6日であった。

2次調査：再テスト法による安定性の検証を目的に2度の調査を実施した。1次調査と同様の測定用具を用いた。便宜的標本である5病院に就業する実習指導者144名を対象に研究協力を依頼し、質問紙、返信用封筒を郵送した。回収には、1次調査と同様の方法を用いた。調査期間は、第1回が2012年7月6日から8月6日、第2回が2012年9月5日から10月5日であった。

分析方法

教育ニードアセスメントツール：項目分析を実施し、49質問項目から35項目を選定した。アセスメントツールの信頼性・妥当性の検証に向け、内的整合性および安定性による信頼性、内容的妥当性、構成概念妥当性を検討した。

学習ニードアセスメントツール：アセスメントツールの信頼性・妥当性の検証に向け、内的整合性および安定性による信頼性、内容的妥当性、構成概念妥当性を検討した。

(3) 第3段階：実習指導者が直面する問題を網羅するカテゴリシステムの開発

研究対象者：病院に就業し、実習指導の役割を担っている看護職者であり、研究の参加に同意が得られた者を対象とした。

測定用具：実習指導者が指導上直面する問題に関する質問と対象者の特性に関する質問を含む質問紙を用いた。実習指導者が指導上直面する問題に関する質問は、問題の有無を問う選択回答式質問と、問題が「ある」と回答した者にその問題を具体的に問う自由回答式質問により構成した。

質問紙の内容的妥当性は、数名の実習指導者への聞き取り調査を通して確認した。

データ収集方法：全国の病院名簿より無作為に抽出した299施設の看護管理責任者に往復葉書を用いて研究協力を依頼した。承諾を得た143施設の実習指導者1,309名に看護管

理責任者を通して、研究協力依頼状、質問紙、返信用封筒を配布した。回収には、対象者が個別に投函する方法を用いた。

分析方法：Berelson, B.の方法論を参考にした看護教育学における内容分析の方法(舟島, 2007)を用い質的帰納的に分析し、実習指導者が指導上直面する問題を解明した。

(4)第4段階：研究成果の統合による看護継続教育支援システム(臨地実習指導者用)の開発

実習指導者が直面している問題の種類と教育ニーズ・学習ニーズの関連を統計学的に解明した。

の結果を反映した教育プログラム事例の提示と立案方法の文章化を行い、それらをシステムとして統合した。

なお、以上の研究における倫理的配慮は、千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得た。

【引用文献】

舟島なをみ：質的研究への挑戦 第2版, 医学書院, 51-79, 2007.

4. 研究成果

本研究の主な成果は、以下の6点である。

(1)実習指導者のロールモデル行動の解明

実習指導者のロールモデル行動を問う自由回答式質問に191名が回答した。191名の回答は、506記録単位に分割でき、このうち340記録単位を分析対象とした。これらを質的帰納的に分析した結果、実習指導者のロールモデル行動27種類を解明した。

実習指導者のロールモデル行動27種類のうち、最も記録単位数が多かったものは【要点をおさえて具体的に説明・助言する】であり、続いて、【学生の意見を聴いた上で指導する】、【学生自身が答えを出せるように助言・発問する】、【いつも穏やかに学生や患者に対応する】、【学生が直面した問題の解決方法を共に考える】の順であった。カテゴリ分類への一致率は70%以上であり、実習指導者のロールモデル行動27種類が信頼性を確保していることを確認した。

また、文献との照合を通して、実習指導者のロールモデル行動の特徴を考察し、実習指導者の望ましい状態7側面を導いた。7側面とは、<根拠に基づきわかりやすく説明する>、<学生が意欲的に学習に取り組めるよう指導する>、<学生個々の実習状況に応じて指導する>、<学生と問題状況を確認し克服に向けて支援する>、<学生を個人として尊重し指導する>、<多忙であっても学生に丁寧に対応する>、<円滑な実習に向け関係者と調整を図る>である。

(2)実習指導者の学習ニーズの解明

実習指導者の学習ニーズを問う自由回答式質問に333名が回答した。333名の回答は、1,272記録単位に分割でき、このうち895記録単位を分析対象とした。これらを質的帰納的に分析した結果、実習指導者の学習ニーズ

22種類を解明した。

実習指導者の学習ニーズ22種類のうち、最も記録単位数が多かったものは【日々の実習指導に直結する看護実践に必要な知識・技術・態度】であり、続いて、【日々の実習指導の基盤となる教育に関する知識・技術・態度】、【実習指導の効果向上に向けた教授活動の実際】、【学生・教員等との関係性形成に必要なコミュニケーション技術】、【実習指導者の役割と役割を果すために求められる態度】の順であった。カテゴリ分類への一致率は70%以上であり、実習指導者の学習ニーズ22種類が信頼性を確保していることを確認した。

(3)実習指導者の教育ニーズアセスメントツールの開発

返送された質問紙753(回収率57.5%)のうち、全質問項目に回答のあった726部を分析対象とした。分析の結果、7下位尺度35質問項目から構成される「教育ニーズアセスメントツール 実習指導者用」を開発した。この尺度は、内的整合性および安定性による信頼性、内容的妥当性を確保している。また、構成概念妥当性を概ね確保していることを確認した。

病院や看護継続教育機関の教育担当者は、教育ニーズアセスメントツールの活用を通して、対象集団である実習指導者の教育ニーズを測定でき、現状に適合し、かつ指導者の適切な役割遂行を支援する教育プログラムを立案できる。また、実習指導者個々にとっては、指導者としての役割をどの程度果たしているかを自己評価するために活用できる。

(4)実習指導者の学習ニーズアセスメントツールの開発

返送された質問紙753(回収率57.5%)のうち、全質問項目に回答のあった698部を分析対象とした。分析の結果、21質問項目から構成される「学習ニーズアセスメントツール 実習指導者用」を開発した。この尺度は、内的整合性による信頼性、内容的妥当性および構成概念妥当性を確保している。また、安定性による信頼性を概ね確保していることを確認した。

開発した学習ニーズアセスメントツールは、実習指導者講習会を受講し終えてもなお、実習指導者が学生指導に伴い要望する学習内容を含んでおり、講習会受講の有無に関わらずすべての指導者の学習ニーズを網羅し、その診断が可能である。

病院や看護継続教育機関の教育担当者は、学習ニーズアセスメントツールの活用を通して、対象集団である実習指導者の学習ニーズを把握でき、学習ニーズを反映した教育プログラムを立案できる。

(5)実習指導者が直面する問題を網羅するカテゴリシステムの開発

実習指導者が直面する問題を問う自由回答式質問に542名が回答した。542名の回答は、798記録単位に分割でき、このうち374

記録単位を分析対象とした。これらを質的帰納的に分析した結果、実習指導者が直面する問題 35 種類を解明した。

実習指導者が直面する問題 35 種類のうち、最も記録単位数が多かったものは【学生の個別状況に応じた指導】であり、続いて、【教授技術の効果的な活用方法】、【業務との並行による指導時間の確保】、【教員と話し合う機会の確保と統一した方針に基づく指導】、【指導者・スタッフ間の一貫した指導】の順であった。

(6)看護継続教育支援システム（臨地実習指導者用）の開発

実習指導者が直面する問題の種類と教育ニード・学習ニードの関連を統計的に解明し、これらの結果を反映した教育プログラム事例の提示とプログラム立案方法の文章化を行い、それらをシステムとして統合した。

現在、実習指導の役割を担う看護職者に対する公的な教育機会は、指導者の養成を目的とする都道府県主催の講習会の他ほとんど皆無であり、指導者に対する看護継続教育は、院内教育に委ねられていると言っても過言ではない。また、院内教育の担当者は、自らの経験のみを頼りに試行錯誤しながら研修を企画、運営している現状がある。本研究が開発したアセスメントツールは、このような現状の課題を解決するために有用であり、実習指導者がその役割を適切に遂行するために必要な教育ニードと学習ニードを明確にでき、それらを反映した教育プログラムの立案に貢献する。

(7)今後の展望

研究成果の普及に向け、開発した2種類のアセスメントツールを著書「院内教育プログラムの立案・実施・評価」(舟島なをみ編)改訂の際に掲載する予定である。

また、実習指導者が直面する問題を網羅するカテゴリを基盤に、実習指導者の問題を客観的に診断できる「問題診断尺度」を開発する。その後、開発した「問題診断尺度」を看護継続教育支援システム（臨地実習指導者用）に組み込み、システムの強化を図るとともに、実習指導者の問題克服を確実に導く教育プログラムを開発する。

5. 主な発表論文等

[学会発表](計4件)

中山登志子、舟島なをみ、実習指導者の学習ニードアセスメントツールの開発、第44回日本看護学会 看護総合、2013年9月13日~2013年9月14日、別府国際コンベンションセンター(大分県)

中山登志子、舟島なをみ、実習指導者の教育ニードアセスメントツールの開発、第39回日本看護研究学会学術集会、2013年8月22日~2013年8月23日、秋田県民会館(秋田県)

中山登志子、舟島なをみ、実習指導者のロールモデル行動、第43回日本看護学会 看

護総合、2012年8月24日、静岡県コンベンションセンターグランシップ(静岡県)

中山登志子、舟島なをみ、実習指導者の学習ニードに関する研究、第37回日本看護研究学会学術集会、2011年8月8日、パシフィコ横浜・会議センター(神奈川県)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中山 登志子(NAKAYAMA, Toshiko)
千葉大学・大学院看護学研究科・准教授
研究者番号: 60415560

(2)研究分担者

舟島 なをみ(FUNASHIMA, Naomi)
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号: 00229098

(3)連携研究者

正木 治恵(MASAKI, Harue)
千葉大学・大学院看護学研究科・教授
研究者番号: 90190339

中村 恵子(NAKAMURA, Keiko)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号: 70255412